

私の手に三枚の写真があります。一枚は少女が窑洞の小学校の教室でひとりで本を読んでいる写真で、気持ちを集中して読んでいる姿が印象に残っています。一枚は校庭での早朝勉強で、何人かの子供たちが地面にしゃがんで勉強しているところで、最後列の女の子の一人が、逆光を受けた国旗を背に、一生懸命指を折りながら数を数えています。もう一枚は同じような写真ですが、赤い服を着た少女が地面にしゃがんで勉強しており、私が近づくと、頭を上げて、好奇心を湛えた大きな眼で私を見ました。これらの写真は1998年6月に黄河岸辺の一斗谷村小学校に来た折、たまたま撮影したものです。その後これらの写真はカバンの中に入れ、何度もここを通りましたが、ずうっとこれらの少女達に出会わないままでした。後になってやっと、これらの子供たちは4年生に進級して皆、郷の町の小学校で勉強するため村にはいないのだと聞きました。

2002年3月のある日、私は週末を選んで村に行きました。というのは、週末なら子供たちが郷の町から自分の家に帰っているからです。しかし、当時の子供たちは今は5年生になっているはずで、姿かたちが変わってしまっているに違いありません。果たして私は見分けることが出来るのでしょうか？

村の入り口で、何人かの子どもたちが道端で遊んでいるのを見かけ、リュックから写真を取り出し訊いてみますと、何と当時窑洞の教室で本を読んでいた少女がその中にいるではありませんか。彼女の名前は郝娜といい、子供たちはその子を‘娜娜’と呼んでいます。出会ったばかりのせいでしょうか、少々ぎこちない感じでしたが、窑洞の中や外で本を見て勉強している姿の写真を撮らせて貰いました。けれども、どれも雰囲気 unnatural です。しかしこの娘（こ）は4年前と比べると顔立ちがよくなって、道で偶然出会っても私には分らなかったでしょう。

子供たちは自発的に、私の前になり後になり、私を村の老エンジュの木の下にある窑洞へ案内してくれました。この窑洞には当時、地べたにしゃがみこんで文字を書いていた郝秀という女の子がおり、名前通りの才気のある娘です。わいわいと賑やかな子供たちは段々多くなり、今度は山を背にした日陰の窑洞にやってきました。ここでは長い間ずうっと捜し求めていた「大足ちゃん」の郝蕊に会うことがで



一斗谷村の少女達

きました。当時かなりな数の子供たちが村の小学校の庭で木の小枝を使って文字の練習しており、その中の一人で大きな目の女の子が好奇心満々の様子で私の方に目を向けました。すかさずその一瞬を写し、戻ってから写真を整理し、仔細に見ますと、眼が大きいばかりでなく、大きな足が靴から頭を突き出して仲間を探していました。

この“大足ちゃん”を私は何度も探し回りましたが彼女は学校に行ってしまうとおり出会うことがなかったのです。しかも偶然ながら、この窑洞はとてもよく知っており、主人とも顔見知り、更に言えば、この窑洞に泊まったことさえあるのです。偶然もあればあるものです。女の子たちは一塊になって、ピークピーク、跳んだり跳ねたり、話しては笑い、笑っては話すといった具合ですっかり打ち解けています。秀秀、娜娜、蕊蕊がそれぞれ写真を持っているので一緒について来た仲間達は羨ましそうです。一斗谷村の少女達は皆それぞれに頭が良くって、顔立ちもよく、しとやかだとは知りませんでした。丁度いい機会でしたので彼女たちと一緒に写真を撮りました。

同じ年の6月、私は再びこの村に来ました。天気は生憎で曇っており、風景は撮り様もなく、人物も陰影のない平板なものになってしまうので、写真を撮る気にならず、それならと、娜娜、秀秀、蕊蕊の一行を村はずれの大エンジュの木のところにつれて行き並んでもらいました。本当は彼女達に陕北の民謡を歌ってもらいたかったのですが、歌ってくれたのは「还珠格格」(当時流行っていた歌の題名)で、これには全くがっかりでした。そんなで私達はまた村の周囲を一巡りしました。時は初夏、アンズやスモモが次々熟す頃で、木の上には果実がたわわに

実っており、とても美味しそうです。

普段はしとやかな娜娜がまるで猿のように敏捷に木に登り、私に食べさせようと袋いっぱい青い杏を採りました。が、残念ながら私はすっぱいものには弱くて食べることが出来ません。ところが家に戻ると、少女達はまた何処からか盆一杯の真っ赤なアンズを届けて来ました。このアンズはまるで桃のようなかたちで、赤と黄色の色合いが見るだけで嬉しくなるようです。口に入れるととろけそうな甘さが広がりました。あまりの美味しさに一気に食べてしまうのが惜しくなり、わざわざ家の窓の外台のところに運んで写真を撮り記念にしました。これは土地の人がアンズと桃を接木した品種で、どうりで他所では滅多に見られないのです。

秋も深まり、また一斗谷村にやってきました。この日は、娜娜の家では棗(なつめ)を干す作業で忙しくしていました。娜娜と彼女にそっくりの妹の苗苗がお母さんを助けてナツメの籠を屋根に運び上げていました。溢れんばかりに棗が入った110斤(約50~60kg)程の重さがある籠をはしごを使って窑洞の屋根高く運び上げるのは至難なことです。娜娜ははしごの上部で力いっぱい引き上げ、苗苗は下から歯を食いしばって押し上げています。姉妹二人心を合わせて協力の末、遂にナツメを窑洞の上に運び上げ、今度は選別をして陽に干します。今年は豊作で姉妹の顔は嬉しそうです。

春節の前夜、家庭の事情はどうであろうと、それぞれの家は皆、きれいに掃除をして年を越します。この日は秀秀の家が掃除をしていました。家中の布団を全部運び出して陽に干し、窑洞の壁と、オンドルの上の一年分のほこりを払いました。秀秀は手を休めず、壁紙を張ったり、見よう見まねで自分が剪っ

た花々や鳥たちなどなどの剪紙を、賑やかに年越しをし、来年が幸せであり、天候に恵まれて豊作になることを願って、片端から窓格子に貼り付けたりしていました。

雪は豊年の印といわれます。冬に入って大雪が降り、一斗谷村と周囲の山々は白一色に染め上げられました。村で一番高いところにある老エンジュの木だけが天と地の間に高く屹立しているだけで、老エンジュにつるされた鉄の分銅が空中で淋しげに揺れ、灰白色の空に映えて人目を引いています。私はカメラを取り出し雪景色を写真に収めたいと外に出て、足元の老エンジュにつながる道が既にきれいに掃き清められているのに気が付きました。その道の突き当たる老エンジュの樹の下に赤い服を着た女の子が箒を動かしています。見ればそれは蕊蕊ではありませんか。なんと働き者で気の利く子でしょう。村を回り積もった雪を踏み一巡り写真を撮って戻る頃になって、村長が老エンジュの樹に吊るされた鉄の分銅を叩いて、村の人に雪かきを始めるよう呼びかけていました。

2003年5月初めのある日、私はまた一斗谷村にやってきましたが、この度は少女たちに別れを告げるためでした。私の延川県での仕事は終わり、今後ここ

に来てこれまでのような十分な時間はないでしょう。少女達はそれぞれ自分自身で刺繍した一対の靴の中敷を私に贈ってくれ、私を感動させました。それらは彼女達の勉学の時間を割いて刺されたものであり、しかも彼女達の処女作なのです。私は感激に耐えず、それぞれの家にお礼に回りましたが、かえってご飯を食べよう留められたりしました。

好意は辞退しがたく、私は娜娜と苗苗の家で食事をするようになりました。夜、主人は特別に卵を炒めてくれたのですが、これは当地では上等なおかずと見なされているものなのです。私は少女達を呼び



娜娜と苗苗



宿舍の少女たち

一緒に食べるように誘いましたがどうしても応じてくれませんでした。……私は食べながら苗苗が学校での日々の様子を話してくれるのを聞きました。

先ず日課はといえば、一日中予定がびっしりで、殆ど課外の活動をする時間はないとのこと。宿舎はといえば、18人が一つ部屋で眠り、夜、顔を洗ったり足を洗ったりはしない。早朝であっても水がないので顔を洗うのは稀とのこと。“水だって飲めないこともあるし、生水だって飲めないことがしょっちゅうあるよ。”苗苗のお母さんが言います。“二人が一つ床で寝るんですよ。10何人かの子どもがオンドルの上に固まってね、どうやって寝るんだか…”。そして続けて、“若し夜中におしっこをしに行行って戻ってみれば寝る場所はない…”。姉妹は一緒に声を上げて笑いました。

次の日の午後、私は早々、郷の中心の小学校へやってきました。子供たちは既にあちこち周辺の村々から続々と学校に集まってきました。一斗谷村は学校から10里程度(約5km)で、一番近く、ですから子供たちも急がずのんびりやって来ます。学校には伏羲河村から来ている先生が居り、私が彼に勉強の時間割を尋ねると、彼は丁度ガリ版刷りの時間割を手にしており、私にくれました(図参照)。

暫くして一斗谷村の子どもたちが学校に到着しましたので、私は子どもたちと薄暗い寝室に行きますと、もともと広くない寝室のオンドルの壁際にいくつかの大小不ぞろいな木箱が置いてあり、これが子供たちの私有物なのです。ついでに彼女達に木箱を開いてもらおうと、本ばかりではなく、夜食用の林檎や干からびてばらばらになった馍馍(餡のない饅頭)の切れ端があります。私は少女達をオンドルの上で一緒に写真を撮って記念とすると共に、これが少女達の偽りのない学習環境、生活環境であることを他の地域の人にも見てもらいたいと思いました。

一年以上経った2004年7月のある日、これらの

起床	5:40	6:05
早操	6:05	6:25
早读	6:25	6:55
第一节	7:05	7:45
第二节	7:55	8:35
第三节	8:35	10:05
第四节	10:05	10:40
第五节	10:50	11:30
第六节	11:40	12:20
第七节	12:20	1:05
第八节	1:05	2:00
第九节	2:00	3:10
第十节	3:20	4:00
清静	4:00	4:20
晚饭	4:20	6:10
晚自习	6:10	6:30
晚自习	6:30	7:20
晚自习	7:20	8:10
准备	8:30	
熄灯	8:35	

泾川县中 2003年度

少女達に会いたいと思い、私は再び一斗谷村を訪ねました。一年を越す歳月の間に少女達はずい分変化していました。皆中学校に進学し縣市(県庁所在地の町)で勉強しています。子供たちの勉強の為に、蕊蕊の家は街にある貸家に引っ越していて写真の撮影が出来ず残念でした。秀秀はこの日の午後、自宅に帰ってきましたので写真を撮りましたがどこか疲れた感じで、この半年間の学校の生活が決して生易しいものでないと分かります。

2日目の午前中、遂に娜娜と苗苗が砂埃にまみれて急いで街から戻ってきました。彼女達がとても疲れているのは分かっていますが、私も又彼女達をゆっくりさせる時間的なゆとりはありません。どうしてもその日の内に縣市に戻らなければならないスケジュールだったのです。最も同情に値するのは苗苗でしょう。家に着たばかりで、まだ落ち着いて座りもしないのに、重湯(稀飯:米やアワのかゆ)を飲むや私と車で縣市に戻るのです。しかし、この娘は又車に酔い、道すがらずと家ですすったばかりの重湯を全部吐いてしまいました。

休暇というのに、苗苗は県で英語の補習を受け続けています。自分の基礎学力が十分でなく、努力しなければ他の人に負けてしまうということを知っているのです。「この娘(こ)は本当によく勉強をし、昨年縣市の学校に変わったときの成績はクラスの真ん中だったけど、今回の卒業試験ではクラスで前から三番目なんですよ」とお母さんは言います。苗苗は主要大学に入学したいと考えています。私は心から彼女の夢が叶うことを願い、一斗谷村の少女達の願いが果たされることを願っています。

苗苗が書いてくれた“アンケート”は、原稿を揃えるときになってもまだ届きませんでした。恐らく郵送の途中で紛失してしまったのでしょうか。私が電話で彼女の理想を訊くと、彼女の夢は大学に入ることだと告げました。苗苗は、黄土高原の希望を一身に集めた苗です。彼女は私が撮影した少女達の中で山から外に出てゆく、最も希望を持てる一人なのです。(田井訳)



少女たちが刺繍の靴の中敷 →